

北斗だより

令和5年度 第8号
(11月1日発行)
愛媛県立今治北高等学校

考えることをやめない

人権・同和教育課長 上川 良子

先日の文化祭で「未来へと続く道～忘れない五月の空～」を聞いて、どんなことを考えましたか。戦時下で、生きたくても生きられなかった方がいらっしやったことを知って、何を思いましたか。「今、いくらでも自分の人生を生きられる時代に、簡単に死を口に出してほしくない。」という言葉に、何を感じましたか。

昭和18年、戦局は不利に傾き始め、昭和19年11月に入ると、本土空襲が本格化し、建物や子供たちの疎開が始まりました。昭和20年4月には、米軍が沖縄に上陸しました。今治空襲は昭和20年に計3回、4月26日、5月8日、8月5～6日との記録がありました。5月8日の死者は29名、そのうちの11名が本校生でした。8時30頃、最後の爆撃があり姫坂山に数発の爆弾が落下。20名ずつ分散して退避していた1グループが被害に遭ったそうです。8月の空襲は苛烈を極め、市街地は壊滅状態に。今治北高校を始め、今治明德、今治精華、今治工業などの校舎のほとんどが焼失しています。真夜中の約二時間の空襲でした。3回の空襲で、合わせて500名を超える方が亡くなっています。

戦時中であつたとしても、亡くなった学生たちは死を覚悟していたのでしょうか。明日が来ることを信じ、必死に生きようとしていたでしょう。死亡した生徒の同級生たちは、終戦後、追悼文集『偲び草』を編集し、無念の死を遂げた一人一人に対する哀悼の思いを綴るとともに、学友の死を無にすることがないよう、新しい日本建設に邁進することを誓い合つたそうです。

現在でも、テロや戦争に巻き込まれて亡くなっている方がいらっしやいます。被災し、家族と引き離されたり、家を失ったりした方も。

海外で起きていることだから、自分の知り合いはいないから、私たちには関係ないことでしょうか。もしかしたら、すぐ隣で笑っている友人には、言わないだけで戦争に巻き込まれている家族が、知り合いがいるかもしれません。

こんなことを聞いたことがあります。人は皆、深層でつながっている。水たまりに落ちた滴が全体に広がっていくように、ある1人に生まれた思いは全人類に伝わっていくと。私一人頑張っても。その一人の諦めが少しずつ伝わっているとしたら。

自分にできることは何か。それは、「考え続けること」です。なぜ、どうしてと、考え続けることが人を人にし、人を強くします。考え続けるためには、様々なことを知らなければなりません。学ばなければなりません。知識を蓄え、それをエネルギーとして、自分を、そして、大切な誰かを守らなければならないときに、迷わず行動に移せる人になっていきましょう。

参考文献：「創立百周年記念通史」今治北高等学校

「今治市の戦災 あなたに伝えたい 第二集」今治市の戦災を記録する会

※お気付きの点や、御意見・御質問などありましたら、下に記入の上、お子さんを通じて担任まで御提出ください。

今治北高校の日々の様子をホームページに掲載しています。「今北日記」「生徒の活動」「部活動」など、ぜひ御覧ください。

今治北高等学校 学校公式サイト <https://imabarikita-h.esnet.ed.jp>

----- 切 り 取 り -----

____年 ____組 名前_____